～ レーシック術後の過矯正について ～

今日は週刊誌で取り上げられたこともあり、最近患者さんから時々質問される術後の過矯正について書きたいと思います。患者さんのお話を聞いて、ネットでの情報氾濫によって正しい情報が伝わっていないと感じます。

まず過矯正というのは、文字どおり近視を矯正しすぎた状態で実際は遠視という状態になっています。遠視ではピントを合わせるのに目の筋肉をいつも使わないといけないので目が疲れやすくなり、頭痛などの症状が起こることがあります。
ネットでは術後視力 2.0 という言葉があふれ、あたかも術後視力が高ければ高いほど手術が成功したかのように感じます。少し話はずれますが、アメリカでみた状況に比べると、日本人の視力に対する要求度は非常に高いように感じます。アメリカでは視力が 1.0 でれば術者も「perfect！」と患者さんに話して、患者さんも、それ以上に見たいという様な方は少なかったように思います。これも国民性でしょうか？
術後の裸眼視力をあげることを考えると、やや過矯正気味にレーザーで矯正すればほとんどの人は非常にいい視力が出ます。ただ中には過矯正になりすぎて、前述したような症状で困る方が出てきます。若い方は過矯正の状態になっていても、ほとんど自覚症状がないことが多いですが、年齢とともに目が疲れやすくなり、老眼も早く自覚するようになってしまいます。
ここで問題ですが、もしあなたが手術を考えている患者だとしたら1と2のどちらのクリニックを選びますか？
1. 手術後 100%の方が裸眼視力 1.5 出ています。
2. 手術後 95%の人は裸眼視力 1.0 以上でていますが、5%の方は近視が残って視力が 1.0 未満でした。
やや過矯正を狙って手術を行うと1のような結果になりますが、通常遠視でも近視でもないちょうどのところを狙って手術を行うと、2のように、ある程度の割合で低矯正になることがあります。でもそれが普通なんです。レーザー器械は非常に精密ですが、人間の体はそこまで誰もが同じ状態でありませんので。低矯正の場合は多くは追加矯正で再矯正が可能です。
名古屋アイクリニックではサイプレジン検査を行い、本来の近視の度数を正確に把握してから手術を行い、過矯正の状態にならないように細心の注意を払って手術を行っています。眼科医としてはレーシックを受けた患者さんが生涯にわたってハッピーであるように考えています。

名古屋アイクリニック　小島医師のブログ『角膜外来日記』より